



熊本地震の被災地支援者ら報告会



被災地支援で感じた課題を
話す報告者11日、県庁

車中泊避難、把握に難しさ
炊き出しで栄養に偏りも

熊本地震の被災地支援で浮かび上がった課題を共有するため、大分県は1日、現地で活動した団体などによる報告会を県庁で開いた。さばききれないほど大量の物資が避難所などに届く一方で、車中泊や在宅を選ぶ「見えない被災者」には行き渡りにくかったり、避難所での炊き出しで栄養に偏りがあつたりといった具体的な問題点を共有した。

県、問題点を共有

医療機関や民間団体、自治体職員などの計8人が報告した。オンラインを含めて県内の行政職員ら約300人が聞いた。

課題の一つに挙げたのは、被災者を把握することの難しさ。「人目が気になつて眠れない」などの理由で避難所に行かない人もいたという。

「避難イコール避難所」という考えでは見えない実態がある」と語つたのは、県社会福祉協議会の森美菜子さん(34)。熊本県八代市では市職員が駐車場を回り、1台ずつ車中泊の有無を確認していたが、夜しか戻つてこない被災者も多く「把握は難しい」と感じたという。

車中泊は姿勢が固定さ

れ、血流が滞る「エコノミークラス症候群」を引き起こすリスクがある。森さんは「車中泊専用のエリアをつくれれば、目が届き、支援しやすくなる」と提言した。

日田市のNPO法人リエラ代表理事、松永鎌矢さん(36)は食事に言及した。震災1週間後から、八代市で炊き出しの調整役を担い、全国から駆け付けたボランティア団体を避難所に割り振った。対応は延べ788件(9月29日時点)。

供給も簡単にはいかなかった。「200食用意している団体を100人以下の避難所には案内できない」と松永さん。1000〜3000食を準備するケースが多く、一定規模の避難所に提供が集中するなど、やりく

りの難しさを明かした。メニューも満腹感のある牛丼などが目立つたが、「目指すべきは栄養バランスの良い幕の内弁当」と指摘。生野菜など加熱していない食材を出せない限界もあり、「災害関連死を防ぐには、公費で食事を賄うことも大事」と訴えた。

自治体の要請を待たず支援する「プッシュ型」が定着し、大量の物資が被災地に寄せられた。集積拠点の八代市総合体育館に山積みになっているのに、被災者の元に届きにくい「ラストワンマイル(最後の区間)問題」も取り上げられた。

沖縄県消防防災対策課の嶺井康太郎さん(37)は「当初は市職員が公用車で避難所に配送する作業を繰り返す、非効率だった」と指摘。地元の運送業者とつながり、円滑に運べる手段を確保する大切さを語った。

このほか、地震動の専門家や医師らが報告。大分県防災対策企画課の山口満課長(54)は「支援を受ける側になつたときのことを考えておかねばならない。できることから改善していきたい」と話した。

(羽山草平、中丸遼)



〔問①〕記事の内容を踏まえて、この記事における以下の言葉の意味について説明してください。

- ・見えない被災者
- ・ラストワンマイル問題
- ・プッシュ型

〔問②〕記事の中では、全国からボランティア団体が駆け付けた八代市での食事の供給が「簡単にはいかなかった」とあります。難航した理由を記事を踏まえて書いてください。

〔問③〕大分県防災対策企画課の山口課長は「支援を受ける側になったときのことを考えておかねばならない」と述べています。災害発生時に「見えない被災者」や「物資の行き渡りにくさ」、「炊き出しの偏り」などを解消するために、行政や市民、地元の民間事業者がどのような連携を行うべきか、あなたの考えを書いてください。